

〈研究ノート〉

鎮魂の系譜学

井上章一
森岡正博

井上 ぼくは、若いころ、明治建築の保存運動なんていうのを熱心にやるひとたちの、ちかくにいました。それで、いつも感じるものがあつたんです。

森岡 建築のエコロジー運動みたいなものですね。

井上 まあ、そうですね。それでね、彼らの運動は、けっきよく連戦連敗なんですよ。明治建築が、いくら文化的に意義があるといっても、役にたたなければ、すぐこわされる。新しい現代建築にたてかえられる。いくつかの例外はあつて、のこされるケースもないわけではないですが……明治村みたいなねでも、基本的には敗北。保存派の彼らもね、うすうす敗北するだろうなということを知りつつ、保存の重要性をうったえていくわけです。これがね、ちょっとへんだと思つた。

森岡 負けることが分かつているのに、闘つてしまう。まあ、マゾヒストの集団ならば、そういうこともありえますが……。

井上 マゾっ気なのかな。でも、ある種の攻撃性もあるんで

すよ。あの、企業つて、やっぱり生産性優位の社会でしょう。役にたたなくなつたものは、すぐにすてますよね。古びてつかいものにならなくなつた明治建築の社屋も、こわします。保存派は、そこを批判する。スクラップ・アンド・ビルドでつっぱしる企業はよくない。そういう企業をうみだしてしまふ、生産力至上主義の近代そのものがゆるせないつてね。つまり、彼らは、企業社会と近代を非難するスタンダーを演出することができるとすよ。だけど、企業社会が保存に力をいれれば、保存運動のひとつは、しゃべる言葉をもてなくなるわけです。運動で負けるからこそ、言説面では敗者が光るつていうメカニズムを、どこかでちゃんと計算にいれてるんじゃないか……。

森岡 なるほど、現実世界では敗者となりながら、しかし同時に言説世界のメディア空間では勝利を手に入れるつていう構造ですね。ただ、井上さんの説明は、あまりにも一面的ではないでしょうか。彼らだつて、「明治建築の保存」かそれとも「言

説界のスターか」という選択をマジに迫られれば、やはり前者をとると思いますよ。

井上 うん。でもね、明治建築は無条件に保存されるという体制ができてしまえば、明治建築保存のアピールが売り物にならなくなるのも、たしかでしょう。ほとんどの話は一面的だと思うけど、そういう一面は、あきらかにある。敗者の側につくことで、殉教の徒になりおおせることができます。今、私の言葉は、ほろびゆくものとともにある。ああ、私の信じる大義は、今、専制的圧力の前に屈服しつつある。とまあ、こういうナルシズムもエンジョイできる。けっきょくのところで、保存論者は、どこかでこういう情熱にうごかされているんじゃないでしょうか。ただのマゾっ気ではない。脚光をもとめる自己顕示型のマゾです。

森岡 井上さんは、保存運動をすすめる側の立場に身をおいて、そこに潜む殉教のナルシズムを摘出されました。私は、それに加えて、そのような運動を喜んで受容する庶民の側の心理にも注目してみたいですね。明治建築の保存運動にかぎらず、エコロジ的な保存運動一般は、今日では非常に庶民の受けがいい。新聞を見て下さい。読者の好みに敏感な新聞は、いつも保存派に味方するスタンスをとる。メディアが、保存派のナルシスティックな言説をばらまくことで、一般読者も、殉教のナルシズムを運動家と共有できる。これは、いわば、メディア全体を巻き込んだナルシスの共犯関係です。しかも、読者のほ

とんどは、近代建築の均質な空間の中で、クーラーなんかかけて、快適に新聞を読んだりしている。

井上 そう、けっきょくは、企業社会の論理、あるいは近代に加担している。みんな、なにほどこかは、明治建築的なものをたたきつぶす側の人間なんです。で、そこにうしろめたさをいだく人々も、とうぜんでてくる。保存派の議論は、このうしろめたさにつけこんだ霊感商法的な商品……と、こういうといえずぎだとは思いますが、そういう一面をもっているわけですね。**森岡** 一種の免罪符の商品かもしれませぬ。これを買っておけば、近代社会にぬくぬくと生きている後ろめたさも、一瞬ごまかせるといふような。

井上 うん。近代批判の言葉をしゃべり、書き、あるいは聞き、読むことで、ナイーブなひとたちは自分も近代に加担しているというのを、忘れられるんです。いや、そればかりじゃあない。被害者ぶりっこをすることさえできる。保存派の言葉という商品を買うことで、その一瞬のこちよさを、手に入れてるんじゃないかな。贖罪をかなえてくれる商品……ですかね。

森岡 井上さんのおっしゃるとおり、建築や自然の保存運動は、近代以降連戦連敗です。しかし、おもしろいことに、「貴重な町並みや建築を保存しよう」「失われゆく自然を保存しよう」という言説には、誰ひとり正面切つては反対してこなかった。すなわち、保存の「現実」は連敗続きなのに、保存の「か

「げえ」だけは言説界の王者の位置をずっとキープしつづけている。この裏には、「先覚者たちのたびかさなる警鐘にもかかわらず景観や自然は破壊され続けてきた」という、一見わかりやすい論理を超えた、もっと深い深層構造があるような気がしてなりません。みてごらん下さい。いまや、「地球環境の保護」は、誰ひとりとして正面からは反対できない第二の天皇制みたいなものになっていますよ。「現実」と「言説」をめぐる、このねじれた関係は、単なるナルシズム理論や贖罪理論では解明できないでしょう。「現実」と「言説」のダイナミズムを巧妙にとらえる構造理論が必要です。

井上 そのとおり、保存の、その「言葉」は勝者です。言説の世界では、それが正論であり、それこそが他を圧する抑圧的な近代なのかもしれません。そういう言葉の前で、今ぼくがしたような、からかい半分の指摘は無力です。たちまち屈服させられるでしょう。つまり、そこでは、ぼくこそが敗北のロマンティズムをあじわえる立場にある。まあ、ぼくのこととはともかく、「言葉」の世界で君臨したいひとは、負けいくさについてたほうがいいわけです。けっきょく、言葉をあやつりくみたててゆく職能人たちは、「言葉」の世界で、たがいの覇権をあらそうわけですから、みんなどこかでは負けたがっているんじゃないかな。

森岡 要約してみましょう。ことばをあやつる文化人は、「敗北」のもとにむらがる。「敗北の予感」にひきつけられて、

ハイエナのようにむらがり、それが文化史を作ってゆく。そして今日では、「保存」がその敗北のにおいをムンムンさせているわけですね。

井上 みもふたもなく言いきると、そうですね。だけど、敗者の側になつて、勝者を非難する言葉には、ある種の社会的な機能がある。それは、ひとつの明確な役割をはたしているのです。

森岡 どういう役割？

井上 葬式の弔辞みたいな役割ですね。明治建築がつぶされる。つまり、死ぬわけです。で、誰かが、弔辞を述べなきゃならない。葬式をやってやらなきゃいけない。そういう仕事に動員される葬儀屋さん、あるいは僧侶。それこそが、保存派のインテリなのではないでしょうか。

森岡 すごい命題です。文化人インテリは、死にゆく文化のいわば「看取り」をして「弔辞」をあげる役割を、果たしてきたというわけですね。この命題は、単に明治建築の保存だけではなく、すべての文化事象にまで広げて考えることができる。つまり、ほろびゆくものの前に立ってその死を看取り、弔辞をあげることで、これが文化人の社会的機能のひとつであった、と。ほろびゆく文化事象のターミナルケアと葬式をやってきたわけだ。

井上 そう、葬式さえやってあげば、もうだいじょうぶ。敗者のたたりはない。安心して勝者は、……まあ、ここまでの議

論では近代社会のことですが……近代的専制、あるいは抑圧を遂行することができる。逆にいうと、それをするために誰かに葬式をやってもらわなければならぬ。その葬式執行人こそが、敗北の側にたつインテリだった……。

森岡 なるほど。近代のシステムは、敗者の怨念をしずめるための「装置」として、文化人を動員したわけですね。文化人が敗者のために詩をうたい、メディアを通してそれが一般人のあいだに共有されるとき、敗者が発する怨念のオーラは徐々にしずめられ、その結果、抵抗が減って、さらなる近代化が進む。そういうダイナミズムがある。してみると、保存派の文化人とは、近代のシステムが仕掛けたこのダイナミズムの一駒として、盲目的につきうごかされている、悲しき一兵卒なのですね。

井上 保存派は一見すれば、近代批判をぶっている。だけど、それは、ひょっとしたら、近代化をおしすすめるための地ならしをする儀式、地鎮祭の言葉ではないのか。その点では、近代に加担しているわけです。近代化、あるいは明治建築的なるものにはたいする勝利をおしすすめるためには、敗者におもいつきりうつぶんばらしをさせたほうがいい、ということかな。とにかく、それは、一種の魂しずめ、鎮魂の役割をはたしているように思えます。

森岡 近代批判の言説が、実は「鎮魂」の役割を果たすことで、逆説的に近代システムの運動に貢献することになる。これは、近代のシステムを記述するシステム理論それ自体を、民俗

学あるいは文化人類学が、取り扱えるということの意味しますね。……ああ、「鎮魂の文化人」というと、私の頭の中を、二三の文化人の顔が通り過ぎる……。

井上 ぼくの頭のなかにも浮かびます。

森岡 それはさておき、井上さんのご専門の「歴史学」のフィールドでは、このテーマはどのように展開できるのででしょうか。

井上 ぼくは、いわゆる歴史学者ではありません。ですが、まあせっかくのさそい水ですから、歴史的な見取り図をえがいてみましょう。じつは、この鎮魂というメカニズムは、昔からあった。菅原道真を追放した勝者たちが、彼を神様にたてまつったことで、怨霊封じをして、勝利をたしかなものにするという例のパターンです。崇徳上皇の例もそれですね。梅原センセの説では、法隆寺も、聖徳太子の怨霊をしずめるためのものだったという……。これだけであつく神格化してやったんだから、現実の世界ではオレたちのじゃまをしないでくれ……！ いろいろからあったのかはよくわかりませんが、昔からあったこのパターンが、今日では近代批判、エコロジー思想というかたちになる。なぜなら、今日では近代こそが現実世界での勝者であるからです。

森岡 こういうふうに一般化してよいでしょうか。二つの相容れない勢力が戦いをする。このとき、一方が勝ち、他方は負けます。勝った方は、敗者を徐々に征服し追い詰めてゆく。た

だしこのとき、滅びゆく敗者は、死に際に、強力な怨念のシャワーを発します。このシャワーの毒は、多くの人々に良くない影響を与えるかもしれない。そこで、勝者は現実世界での勝利と引き換えに、敗者に架空世界での勝利を渡す。そうすることで、敗者の怨念の「鎮魂」をとりおこない、戦いを終結させる。架空世界での勝利とは、たとえば、敗者の言説が文学や論文として人々に受容され、歴史に残ってゆくというようなことです。『平家物語』などはそのよい例でしょう。あ、突然ひらめきました。学問の正統派というものは、このような現実世界での敗北の連続によって、逆に形成されてきたのかもしれない。つまり、敗者の鎮魂の連鎖としての思想史……。

井上 敗者の架空世界を言葉の綺羅でかざりたてていく。そういう思想にも、ある種の系譜があると思います。鎮魂の系譜学みたいなテーマが、思想史の課題になりうるでしょう。これがきちんと整理できれば、エロロジーとか明治建築保存といった言葉の群れが、鎮魂の系譜史において、どのあたりに位置づけられるのか、さらにはどういうところから出現してきたのか、あきらかになる。実証的にトレースするのは、けっこうしんどい作業やとは思いますが、こういう研究がありえるということは、ひとことのべておきたい。

森岡 鎮魂の系譜学。新しい学問の誕生ですね。それで連想するのですが、たとえば鎮魂の「紋切り型」というものが、何種類かあるんですよ。たとえば、「昔はよかった、昔へかえれ」

「なにが我々をここへ導いてしまったのだろうか」「この遺産を現代にもう一度よみがえらせなければならぬ」なんか、そうですね。

井上 ま、もともと葬式の弔辞ですからね。「紋切り型」になるのは、当然ですよ。逆に、その「紋切り型」をやぶってしまおうと、鎮魂の機能をきちんとはたせなくなってしまうのです。独創はいけません。クリーシェに徹しなければならぬのです。**森岡** うーん、そうか。鎮魂の思想家たちの作品は、詩として光り輝きます。いままで、どうしてそうなるのか分かりませんでした。たったいま目からうろこが落ちました。鎮魂に独創があつてはいけない。鎮魂はクリーシェの枠にはまらなければならぬ。それでいて、なおかつ光り輝くためには、既成のパラダイムを打破する「学問」としてではなく、そのパラダイム内でのびやかに新たな旋律をうたいあげる「詩」にならざるをえないのです。

井上 たぶん、おっしゃる「詩」とか「学問」などというジャンルのありかたそのものも、時代によってうつりかわっていくのではないのでしょうか。ぼくは、とりあえず、そういうジャンルわけをこえた、おおいなる鎮魂への情熱ということを考えています。そして、この情熱が各時代の「宗教」、「論壇」、「詩」、「学問」あるいは「政治運動」さらには「政治体制」といったジャンルへ、どのように分配され、どういったふうに表現されるかを、歴史的にきちんとおさえるのが、鎮魂の系譜学

だと思うのですが……。

森岡 (独白…そういうことを、言いたかったわけじゃ、ないんだけどなあ。まあ、いいか……。) はいはい、それで？

井上 おっしゃるように、「学問」がパラダイム・チェンジ、あるいは実証主義にウェイトをおくジャンルになりだした近代だと、鎮魂歌は「学問」のなかではうたいにくいと思います。すくなくとも、制度的な学会の「学問」というフィールドでは

ね。明治建築の場合も、保存運動をせじたいは、あんなもの「学問」じゃあないと思われていましたよ。だから、保存論をぶつときにも、さまざまな「学問」的粉飾を余儀なくされてきましたね。「学問」というジャンルは鎮魂の情熱にどのような変態……これは文字どおり変態だと思えますが……を要請するののかという分析も、系譜学の課題になるでしょう。

森岡 ふむふむ。壮大な射程ですね。ところで、この鎮魂の系譜学を、いま話題のエコロジに適用してみたいのですが。

井上 現代的な課題としては、そこですね。もともと、こういう話も、今のエコロジー思想をどうあつかうかという興味から出発したわけですから。

森岡 さっき、自然環境の保存は敗北を続けていると言ったのですが、誤解をさけるために、もっと正確に語っておきますね。自然保護には、「保全」思想と「保存」思想の二つの流れがあります。「保全」とは、人間が地球上で快適に過ごせるように、地球を庭園と見立ててそれをしっかり人間の手で管理し

てゆこうという発想です。それに役立つテクノロジーは、どんどん利用します。これに対して「保存」とは、とにかく原生林や野生動物に人間が手を出さないようにして、自然をありのままに残してゆこうという発想です。科学技術にはできるだけ歯止めをかけようとしています。最近のエコロジ運動史は、理論論的な「保存」思想の連戦連敗史として捉えることができます。

井上 「保存」はイデオロギッシュな架空世界の挽歌だけれど、「保全」は、もうすこし現実的なんですね。で、負けつづけてくると。それでどうでしょう。言説の世界では、原理主義的な「保存」のほうが、輝きやすくなるんでしょうか。

森岡 まさにそうなんです。西洋の自然保護思想史で光り輝いているのは、「保存」原理主義の思想家のものばかりなのです。たとえば、古くは、「自然にかえれ」のジャン・ジャック・ルソー。神秘派のエマソン。森の生活のソロー。森に酔える人ミューア。ランド・エシックスのレオポルド。彼らの思想史こそ、近代西洋の自然保護思想史の華なのです。彼らはもちろん近代人です。ですから、近代の科学技術を憂い、自然破壊を憂い、「自然」を、「森」を、「神秘的な生命」を謳い上げてきました。ですが、彼らの鎮魂の詩にもかわらず、(というか、その鎮魂の詩が功を奏してか) 地球環境は悪化の一途をたどり、近代は次々と自己増殖してきました。

井上 たしかにそうですね。じっさい、自然をどんどん破壊してゆこうなどという説をとなえたことで後世から評価される

思想家なんて、ちょっと思いつかない。やっぱり、思想家として思想家列伝に名前をのこすには……まあ葬儀屋のラインナップでしかないのかもしれませんが……敗北を前提とした原理主義のほうがいいでしょう。「保全」なんてのも、社会党右派みたいで、いまいち思想としての迫力がない。

森岡 井上さんは「持続可能な開発」ってことばをご存じですか？

井上 いえしりません。おしえてください。

森岡 「持続可能な開発」とは、よーするに、地球環境が全滅しない程度にセーブして開発をすすめましょうという意味で、これは九〇年代の地球環境問題のキーワードです。このことは、古くからある「保全」の思想を、いま風に言い換えたものです。そして、おもしろいことには、九〇年代の地球環境問題では、「持続可能な開発」派がメインストリートにおどり出て、「保存」派は背景にしりぞいてしまいました。私は、一九八〇年前後のどこかの時点で、「保存」派の敗北が確定したと見ています。現状を冷静に見ると、確かに、地球汚染の解決策は「保全」しかありません。「保全」派はリアリストです。彼らは、「近代」を温存したまま、環境問題を解決しようとしています。「近代」の原理とシステムこそが、環境問題を解決できるといいません。「近代」の犯したミスを解決するのは「近代」しかない。「近代」は「近代」によってのみ克服される。わけのわからない「ロマン主義」や「アニミズム」は事態を悪化させるだけだ。

そして彼らは、冷戦後の政治状況をにらみながら、しっかりと政治と連係して、いつきに「国際問題としての環境問題」という枠組みを作り上げてしまいました。これでは、政治オンチが多い「保存」派の出る幕がありません。

敗北が確定した保存派とそのシンパは、これから最後の鎮魂の詩をうたうことでしょう。「地球との調和」「森は生きていく」的紋切り型は、八〇年代を通して、増加しつつあるという印象をうけます。「縄文文化論」「アニミズム再考」などの言論も、この流れの末裔として位置付けられるかもしれません。

井上 現実的な「保全」派が、事態を掌握してゆくためにも、イデオロギッシュな「保存」派にてきとうなガス抜きのある場をあたえたほうがいいのでしょね。自分が勝者になるためには、敗者に、発言上の特等席をあたえるべきだと思います。でなければ、鎮魂のメカニズムも作動しませんから。ということは、つまり、発言という世界で特等席を獲得しようと思うひとには、イデオロギッシュな「保存」運動的言辞を弄するほうが得策だということかもしれませんね。

森岡 そのとおりですね。思想的に見れば、いま「保存」の詩を高らかにうたいあげた者が、後世に光り輝くことになるでしょう。まあ、いまだと、「地球」とか「森」に聖性を見るというミュージアロブティックのノリがトレンドイでしょう。

井上 あとね、「神話的世界」とか「野生」なんてのもそうかな。近代が抑圧したものへの賛歌をかなでることで、思想家

列伝にはいつてゆく。「米」が抑圧した「イモ」を称揚する、「山人」、「サンカ」をもちあげる。民俗論でも、そういうのがありますよ。これは、数え上げていけば、きりがなくもありませんね。発想のパターンは同じ。ただ、とりあげるアイテムがちがうという……。どのアイテムをとりあげるの、そのパターンをいちばんかがやかせることになるかというところで、論客の弔辞作文職人としての才覚が問われることになる。

森岡 『思想家になる方法』という本が書けそうですね。

井上 ぼくは、できたら思想家でいきたいと思っています。

森岡 突然、思い出したのですが、「脳死臨調」というのがありましたね。

井上 ああ、ありましたね。あれも、この話と関係があるのですか。

森岡 八〇年代にさかんに議論された脳死・臓器移植問題は、関係者の間では、はじめから結論は見えていました。脳死移植再開という結論です。そして実際に、その方向へと流れは傾斜していきました。八〇年代半ばから後半にかけて、竹内基準の作成、日本医師会の見解発表と、移植再開へ向けての推進派の戦略が順調に実ってゆきました。しかし、当時この問題を調べていた私の実感からすると、ちょうどその時期から、庶民のあいだに、「脳死には本当は反対だが……やむをえない」的なフラストレーションが急激にたまってきたように思えます。九二年に最終的なG〇サインをだした脳死臨調は、その最終答申の

中に「脳死反対意見」を併記するというウルトラCを行ない、それによってこのフラストレーションのガス抜きをして、見事に「鎮魂」の役割を果たしたと私は見ています。

井上 うーん。まあ、しかし、そういうことは、ほかにいっぱいあるんやろうね。現実的な仕事にたずさわるひとたちが、架空のイデオロギーにこだわる論客の話をきいて、「いやー、貴重な御意見ありがとうございました。私たちも、そういう意見が大切だと思ってるんですよ。心があらわれまして」なんていいながらもちあげておいて、じっさいには、その意見と反対のことをやりはじめ。いちおうガス抜きはしたし、論客のほうも、脚光をあびられる。これで両者が共存できるということですか。

森岡 きびしいかもしれませんが、そう言えると思います。

あの反対意見を新聞で読んで、「ああ、オレが感じていたことを見事に表現してくれた人がいる」と、胸のすくような思いをした人も多かったと思います。ガス抜きの効果ですね。推進する側の人も、最終答申の象徴的意義を敏感に感じとって、やれ一安心と思ったことでしょう。脳死臨調の最終答申には、新たな言説はまったく見られませんでした。「鎮魂」という儀礼的役割だけは、きっちりとしたと評価できるでしょう。

井上 まあ、ずいぶん、鎮魂の話をしてきましたが、この系譜からはずれる思想もあるんですよ。今でいえば「フェミニズム」！ あれは、いつてみればイケイケドンドンの思想でし

よう。失われたものへのノスタルジーはありません。これから獲得するはずのものへ、つきすすもうとする進軍ラップの言葉です。ああいうものの系譜学も、ちゃんとおさえたいうえで、鎮魂をきちんと系譜史上に位置付けていかなければならない。

森岡 井上さんらしい、目配りのきいたご意見です。しかしまあ、我々の対談シリーズには、どこまでもフェミニズムが、まとわりついてきますね。

井上 今、「フェミニズム」の目標は、まだ実現されていません。だから、その言葉は、思想としてかがやくことになる。先駆的な少数者の栄光をになって、脚光をあびることになります。だけど、いずれは勝利をとげるストーリーですから、そのときには光りをうしなうでしょうね。いってみれば、「フェミニズム」は、実現されたとたんに言葉としてのががやきをうしなうことを宿命づけられた思想なんです。あたしたちフェミニストがこんなふうに脚光をあびる時代は、はやくおわりになってほしいということなんです。その点、勝ち目のない敗者を鎮魂する言葉は、つよい。負けつけられるわけですから、言葉としては光りつけられるわけです。

森岡 確かに、上野千鶴子や山下悦子は、いま上昇気流にのって光り輝いている。落ち目なのは、男性文化のほうですかね。

井上 逆に、ビートたけし風の発言が、敗者⇨男の鎮魂に、今なりだしているんじゃないですか。昭和三〇年ごろまでの父親はえらかった。昔は男が君臨していたもんだ、などという話

ですからね。だけど、こういう意見は、鎮魂のスタイルをとっているわりには、インテリ界の覇権をとりにくい。それは、まだまだ男優位の社会が存続しているからでしょうね。もっと完全に男の優位が解体すれば、ビートたけし風な言葉が、文化人界でも、「うしなわれた雄性」賛歌としてかがやくようになるのかな。

森岡 ビートたけしの人気のヒミツは、「鎮魂」のスタイルを先駆的にとっているところにもあるのです。勉強になるなあ。ところで、フェミニズムの中には、さきほど話題になったエコロジエを取り入れているものもありますよね。

井上 ああ、エコ・フェミニね。あれ、考えたら、すごい思想ですよ。「女であることのトタリテ（全体性）」を復元せよ、とか、「いのちをはぐくむ母」なんてのを称揚するわけでしょ。大地母神みたいなノリですよ。その意味では、エコロジエ鎮魂歌の典拠例です。それが「フェミニズム」という進軍ラップと同居しているわけですからね。鎮魂歌と進軍ラップというふたつの系譜史を考えるうえで、まことにおもしろいデータになると思います。これからも、あそこからは目がはなせない。

森岡 エコ・フェミニこそ、鎮魂の系譜学という学問の真価が問われる、最初の関門になるかもしれません。今日は、ひびびさの知の格闘技でした。お疲れさまでした。

(一九九二年三月)